東方の世界ログインやっちゃたよいけないチート

湯飲みの茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方の世界ログインやっちゃたよいけないチート

【Ｎコード】
Ｎ１４２８Ｗ

【作者名】
湯飲みの茶

【あらすじ】
無実の罪で死んだ奴がもしも東方の世界に転生したら？
究極な転生者を作ってみたら？
神がもしこんなのだったら？
こんな出来だけど、作者自身が想い描いた、やってはいけない転生者完成！

注意・チート分は地球上の空気ぐらい、ハーレムは未定、
更新はやれるかなぁ。

第一録　考えてみればそうだと想う（前書き）

やっちゃたよ。やっちまったよ。

処女作がまだ五話しか出してないのに次の出しちまったよ。

あっ！ダメダメな小説ですけどみてくれる方、ご歓迎いたします。

ようこそ、湯飲みの茶の小説へ。

第一録　考えてみればそうだと想う

裁判官「被告人、御乃那一斗（みのなかずと）は、人を１３人刺殺した罪で死刑に称する。これにて、裁判を終了する。」

「ちょっと待って下さい！！俺は何もやってませんよ！！もういちど調べて下さい！」

刑事「見苦しいぞ、お前は凶器からべったりと指紋が着いていて、更にアリバイもない現場周辺にも居た。そんなお前を犯人と言わず誰が犯人だと言うんだ？」

「ホントにやってないんだ！もう一回！もう一回で良いから調べてくれ！！」

刑事「それは、無理だ。調べたとしても同じ結果だ。」

「べ、弁護士さん助けてくれ！」

弁護士「さすがに、凶器に指紋、アリバイなし、周辺に居ることから、助けたいが助けられない…せめて、アリバイや現場周辺に居なかったら別だったが…役に立てなくてすまない。」

そ…んな…

警官「ほら、さっさと来るんだ！」

死ぬのか…、何もしてないのに…

数日後

俺は電気イスに縛られていた。

「御乃那一斗…残す言葉は有るか？」

「……この世界に生き返ったら…本物の大量殺人者としててめぇら全員殺してやる…」

「そうか…じゃ、電源を入れてくれ。」

ガクッ！と頭が倒れ絶命したのを確認して殺した人達は言った

「ははは、生き返るなんてアニメじゃないし、出来るわけないのに何言ってんだこいつ？」

「そうだな、これが糸野田町大量殺人事件の犯人だとはな、これがまさにミイラ取りがミイラだな。」

「おっ！うまいな！まさにその通りですね！はははは。」

しかし、その二週間後、自分がその犯人だと一斗の友達と名乗る物が自首し、世界が驚く事件に発展し、それがメディアに知られ警察が罪のない人を殺したとニュースになった

…死んだのか、俺……。
それにしても…こんな黒い色した世界が死後の世界なんて…まぁ、今の俺には丁度良いか…
でも、信じたかったなぁ、小説みたいな転生って物を…

『ふむ、そう思っているのなら、やってみるか？その転生とやらを。御乃那一斗とやら。』

声のした方を向くとそこには、木のような杖を持った女性が居た

おまえは？俺がそう思うと女性が

『お主などの人間だと神と言う存在でわたし達から言うと■■■■■■と言う者だ。』

？？今、あいつなんて言ったんだ？

『あぁ、最後の言葉か？あれは人では発音出来ぬ、無視してかまわん。それで、繰り返すようだが転生せぬか？』

俺って神に殺されたのか？だから神が転生させに来たと？

『質問に質問で返すでない。ちなみに、その答えはＮＯだ。純粋に死ぬ奴見てお主が目には入ったからだ。転生なんて実は、千年に数人だけで後はこの黒い世界、お主などの物で言えばパソコンのごみ箱のような世界で消えるだけだ。わたしの気まぐれで転生させてやるんだから。早くするかしないか言ってくれ。』

…するよ

『そうか！だったら早速。』

待て！待て！待て！場所選べせてはくれないのか！？能力とかは！？

『場所？そんなもの、お主の記憶などを見れば一発だ、東方の世界であろう。

能力は私が付けてやる、ちなみに今、お主が思っておるギルガメッシュの宝具などは禁止じゃ、

あの世界では無理に等しいからな？

しかも、そんな弱くてオリジナリティがない物などあげられるか。人間の限界を越えるように～、とかそんなもん大昔からじゃないと貰っても意味無いだろう。そんなもん、もはや人間でなく別の生き物の吸血鬼や化け物になれば良いのに…だからわたしからお主に与える能力は最強のチート、転生者の常識外、な能力…見た者の模範に成れる程度の能力をやろう。最高神の名に恥じぬ妖怪に成ってくれ。』

何その能力！？てか神って最高神だったの！？ゼウスやオーディンとかは！？

『質問が多い奴だなお主は…そいつ等は神として居るが…人間が勝手に最高神と言っているだけでおり、あやつらは神の中でも最低ランクの神だ。そうでなきゃ、もはや人間程度なら見ることは出来んし、人間界にも行けるはずがない、弱いから人間に見られ、神として奉られたのだ。ちなみにそれ以外の神が人間界に行くと世界が簡単に滅ぶ。前に一回、中位クラスの神が下り指を振った程度で恐竜とやらが隕石で絶滅したしな。では、長話は終わりだ。容姿などの、軽いものならいじってやるが？』

…なら、容姿はそのまま俺のままで、年齢は好きな時に不老に出来るように、あとは…不死ぐらいかな。

『ふむ、良いぞ！。それでこそ私の転生者！、妖怪で生きること認めるか！では、せいぜい頑張ってわたしが褒められる位、強い妖怪になってくれ！…あっ！でも能力のせいでお主は神にも成れるかもな！そうなって、もしも死んだら私の旦那にしてやるぞ！まぁ、不死だからそれが何年掛かるか…。じゃ、いってらっしゃ～い！』

ガッ！っと頭を掴まれ俺は意識を失った…

目を開けると、そこは森だった。木で覆われた森の中心に俺は寝ていた。

「転生したのか？いまいち実感がない。」

考えていると頭に神の言葉が響いた

『いや～、ごめん、ごめん。転生時期を言うのを忘れてたよ！』

…いや、大体永琳がまだ地上に居る時だろ？

『さすが！その通りだ。能力の使い方は分かるね？』

…待て！今、頭に入ってきた……。チートじゃないか…さすがにここまでチートって…。もうこれ、恐怖より笑いしか出来ないよ…

『そうかなぁ？今の御乃那の状態だったら弱小妖怪でも、御乃那を

一回は殺せるよ？』

ん？まぁそれは分かったんだけど何で御乃那って言ってんの？

『まぁ一斗って言っても良いけど、なんかあっちの方の一刀を連想させるんだよ。わたしは彼奴は嫌いだ。皇帝なほうである一斗なら好きだけど…』

俺はそこまで嫌いではない

『それよりも、別にハーレム築いても良いけどやりすぎないでね？』

どゆこと？

『最高神の作った転生者だからもしかしたら、御乃那が神になった瞬間みんなが神様になっちゃうかもしれない。』

そうなのかー

『御乃那？もしかしてふざけてる？』

そんなわけない、ちゃんと聞いている。

『そう、仮にも最高神の旦那になるんだから妻の事も考えてないとね？ちなみに、わたし自称ヤンデレだから、妃の数がもし、八百を越えたら、御乃那をうっかり手足を落とした後、家に持ち帰り監禁した後、女全員殺して仕舞うかもね？』

言っとくが東方キャラは百を越えたとしても八百は行かないぞ？しかも、小説じゃないんだから俺みたいな奴がもてるわけがないだろう

『…御乃那はバレンタインデーで何個チョコ貰ったの？』
確か…義理チョコが八十ぐらいだよ本命は無しだった
『ふ～ん』
なんだよ、これでモテないってわかったろ
『わかったよ、御乃那が小説の主人公みたいなのは…』
なに言ってんだよ、とりあえずこの念話みたいの切るからな？またな！

「ふぅ、時期はわかった。とりあえず、エンカウントするか！」

妖怪移動中

「さてと、迷った。どうしよう。能力は使えないからまた歩かないとなぁ。」
また、歩み始めると、ふと端っこに銀髪の女性が見えた
…アレ？あれはもしや、永琳じゃないか？いやあれは永琳だ！
「ひゃほ～～！エンカウントした（ドスッ！）うぼぅっ！！」

永琳「うるさい妖怪ねぇ。でもこんな弱い妖怪がなんでこの森に？それを聞いてから殺せば良かったわね。」

妖怪復活

「いってぇ～な！なにも聞かずに矢を放つって！俺間違いなく一回死んだぞホントに！話しぐらい聞けよ永琳！！」

永琳「私は有名だから名ぐらい知られてても不思議じゃないけど、一応ここは八意家の薬草の森であなたほどの妖怪入ろうとすると障壁で散るんだけど、侵入者だから攻撃するのは当たり前よ。」

「そうなのかー。」

永琳「なんか苛つくわね。」

「そうだ！確か永琳って科学者で薬師者だよね？」

永琳「それよりか、あなたがどうやってこの森に入って来たかがしりたいんだけど？」

「そーーなのかーーー。」

永琳「いい加減にしないと殺すわよ。」

「無理だよ、俺死なないから。」

永琳「そう、残念。なら縄で縛って地下に放置してようかしら？」

「すみませんでした。謝るので、それだけは止めて、死なないけどそれは生き地獄だ。」

永琳「そう、だったら質問を答えなさい。」

「いや、答えろと言われても目が覚めたらここに居たとしか…」

永琳「……ウソは吐いてないようね」

「死にたくないからね。所で永琳、修行しない？」

永琳「いらないわ。あなたから得られる物なんてこれっぽっちもｎ

「人造的に作られた人間が出来るんだけど？」ッ！！？？」

「そっか～…ま、いらないならしょうがないよね～。」

永琳「…そんなこと無理よ、人間を作るなんて、ロボットと同じだわ。人間と全く同じ物なんて作れない。」

「いや、俺の見た者の模範になる程度の能力なら出来るんだよなぁ。」

永琳「証拠は？」

「そうだなー。手軽く不老不死の薬の必要な材料でも言うか？」

永琳「いいえ、言わなくても良いわ、ウソじゃないって目でわかるから。」

「あっ！言っておくけど俺の能力、目が合ったら発動するから」

永琳「めんどくさい能力ね。まぁ家に来ても良いけど、あなた妖怪でしょう？」

「大丈夫、能力で永琳の模範でスタイルとかがあるからよっぽどの事がない限り。

絶対バレないわ、永琳？」

「！？……複雑な気分ね、鏡に映る”自分”は見慣れてるけど、まさかこんな風にして”自分”が現れるのは、しかも、少し私よりかスタイルが良い。」

「これで、大丈夫でしょ？安心して、向こうに着いたら”これ”は解除するわ。それならあなたが作ったロボットでも通るわよ？」

永琳「なんか少し不安だけれども、八意永琳よ。これからよろしく頼むわね？」

「わかったわ、永琳、私は御乃那一斗よ。」

こうして、八意永琳とのファーストコンタクトは終わった

第一録　考えてみればそうだと想う（後書き）

書いてしまった物はしょうが無いと出しましたが、どうだったでしょうか？
ご満足頂ける小説を夢見て頑張りますので、ご指摘やご感想を頂けると嬉しいです。リリなのの方は、今日中に書き上げて更新いたしますご安心下さい。では、リリなのか、東方の小説の次回でまた。

第二録　別れは寂しい、その分のプラスは帰ってくるけど。（前書き）

久しぶりに投稿、遅れた理由？寝てた。疲れたから。

第二録　別れは寂しい、その分のプラスは帰ってくるけど。

永琳の先生となり薬の作り方や機械などの作り方を教えて早くも数年は過ぎた

元々、永琳の技術で文明が平成ぐらいだったのに、そこに永琳の模範と成った俺の存在で

文明はさらなる進化を迎えたがある日…

永琳「月へ行くことになったわ。」

御乃那「へ～、そーなのかー。」

原作を知っており、二次創作の小説も見ているから別に驚かなかった

永琳「でも、御乃那は残念ながら連れては行けないの、上の連中共が御乃那を囮としてロケットを発進させるって…、本当にごめんなさい…。」

御乃那「別に囮ぐらい良いよ今はまだ永琳にしか能力使ってないから弱小妖怪位だけど、少なくともお前よりかは強いんだぜ？足止めなら出来るし。出発は来週なんだろ？早く寝て明日の会議に遅れないようにな。」

そう言って永琳の顔を見ると、永琳の目からツゥゥーーと涙が頬を濡らしていた

御乃那「大丈夫だって今は永琳の模範として人間でもあるんだから、人間達が居なくとも俺は存在できる、死ぬ気もないしな、だから永琳、泣くな。お前は俺の生徒だ、生徒なら生徒らしく先生に涙を見せるな、泣いても良いのは先生だからな。」

俺も永琳と同じ、いやそれ以上に涙を流していた

みっともないと思う人も居るだろうが人であろうが妖怪だろうが、生物である以上、心がある以上、別れって物は辛く悲しいものだ、小説の主人公ってのは凄いな…別れ際に泣かないなんて、俺には…無理だ…

その夜、俺と永琳は自分達の涙が枯れるまで泣き合っていた

～出発当日～

最新の科学が詰まったロケットに永琳が乗っている。俺はそのロケットを守らなくてはならない、たった一人の永琳の先生として…。

御乃那「さすがに宇宙に行けるまで能力はないからなぁ、しばらくの間お別れだな…じゃ！囮役としてがんばりますか！」

俺は手に持っている弓をまだ遠くにいる妖怪にめがけて矢を放った、…矢は見事に先頭にいた妖怪の頭にあたり、その妖怪は絶命したが…さすがに人間が居なくなると聞いて大勢の妖怪が居る。一体が殺されてもまだ大量に妖怪が居る、でも遅い、遅すぎた。妖怪共がここに来る前にロケットは発射もう妖怪共には追えない、まぁ俺はその間に妖怪を百は殺し足止めもしていたが…妖怪は悔しそうに叫び、邪魔をした俺に向かって掴み掛かり殴ろうとした瞬間、…上空から黒い物体が俺達に向かって落ちてきた、その大きな黒い物体に俺は見覚えがあった、二年前に俺と永琳が作った妖怪用の爆弾…

…終わったな地上の妖怪共は、俺は不死だから大丈夫だがそうでない奴は…

そう思っている隙に爆弾が落ち、爆発…妖怪共が塵一つも残すことなく散っていった…

…目が覚め周りを見ると、そこには何事も無かったの様な草木しか無かった。妖怪の姿は何一つ存在はしない、居るのは妖怪ではない普通の生物……目が覚め周りを見ると、そこには何事も無かったの様な草木しか無かった。妖怪の姿は何一つ存在はしない、居るのは妖怪ではない普通の生物……目が覚め周りを見ると、そこには何事も無かったの様な草木しか無かった。妖怪の姿は何一つ存在はしない、居るのは妖怪ではない普通の生物…

御乃那「…自分で作って置いてなんだが、厄介なもん作ったなぁ～、妖力を消す爆弾って…能力が無かったら俺も彼奴等みたいに消えてたなぁ～まぁそのお陰で妖力が消えて俺は紛れもない人間に成っちまったけど…、暇だ…。」

何もすることがない。人間だから孤独死をするかもしれん、…ペットでも飼うか…。

そう思っていたら

『そんなに暇なら今からゼウス達と戦ってみる？』

自称ヤンデレな神からの念話が掛かってきた

『それも面白そうだが、ところで俺妖怪じゃ無くなったけど…』

『大丈夫だ、そこら辺の妖怪に能力使えば元通りになるよ、じゃそっち送るね～』

『ちょっと待て！！誰も戦うなんｔ『答えは聞いてない！』聞けよ～～！！！！』

ブゥウン！！と空間が割れ中から人が出てきてこう言った

「はぁ～彼氏が出来ないよ～もう死のうかな、夫も居ない神様なんてかっこつかないし。」
「やめなよ～死ぬのは～無駄に疲れるだけだよ～、ほら目の前に最高神様が言ってた人が居るよ～お仕事しなきゃ～。」

『……お前さっきゼウスって言ったよな、女性が出てきたが？』
『えっ！男性だと思ったの！？神様って大体は女性だよ！』
『なんだその設定！！どうでも良いから男を出せ男を』
『中位レベルだから無理！じゃゼウスとオーディンに宜しく言っといて！じゃーね！』
ちょ！待て！オイ！！
…ゼウスは聞いてたがオーディンは聞いてないぞ。

御乃那「…で、どっちが誰？」

オーディン「ほら、ゼウスちゃん挨拶しなきゃダメだよ～私はオーディンです～。」

ゼウス「うぅー、私はゼウスだよ～良かったら君でも良いから夫にならない？」

御乃那「そっちがオーディンでこっちがゼウスだな後俺は御乃那だ。ちなみにゼウス？全力でお断りだ！」

オーディン「では、早速ですけれど、命令なので～、ゼウスちゃんからやって貰いましょうか。」

ゼウス「やだよー。彼氏か夫が出来るまで私はやらないー。」
……すっごく…ゼウスのイメージがパリィィィン！と割れたよ…
ゼウス「絶対にやだよ、彼氏が出来るまでこんな戦い……！？本当ですか！！ありがとうございます！”最高神様”！！事情が変わった戦ってくれ！」
何やったんだあの神…

オーディン「どーしたのゼウスちゃん、そんなにやる気なのは出会い系のサクラに一生懸命メールを書いてる以来よ～」
ゼウス「最高神様が私があの男に勝てたらあの男と子を成しても良いって言ってくれたんだよ！もうヤるしかないよね！今まで溜まった欲求を全部吐き出してやるよ！」
ヤバい！！とてつもなくヤバい！！前にあのタイプに会ったことが有るから分かる。
…この戦い負けらんねぇ！！

オーディン「じゃあ私が審判を務めるわね～ちなみにゼウスちゃん？終わっても私の番があるからヤっちゃダメよ～。」
…こいつらなんて言った…。
今こいつら、自分達が勝つなんて言ったな？面白いフルボッコにしてやる。
もう既に、ゼウスの目と俺の目が合っている、今俺はゼウスより強い神成った。
オーディン「じゃあはじめ～。」

ゼウス「貰ったー！！」
いきなり俺は背後をゼウスに取られた、だがゼウスの蹴りを避けて

背後に回る

「フム、早い、速すぎるぐらいに、ただお前よりか俺はもっと速い！！」

俺はゼウスの首に手刀にした手を当てた、気絶して倒れるゼウスに向かいこう言った

御乃那「頑張れ、俺よりか優しい奴は別に居る、悪いが他を当たってくれよ。」
ちなみに、この何でもない言葉でゼウスが御乃那のことを好きになったのは御乃那だけは知らない。
御乃那「さぁーて、アップは終わった、キックオフと行こうぜ、オーディン？」

オーディン「いえ～、キックオフは要りませんよ～降参です～。」
…は？何言ってんだこいつ。
オーディン「私はゼウスよりか弱いので、棄権します～。」
…何だろう、めっちゃ暴れ足りない。
オーディン「あぁ、それと私たち神は下界（人間界）に降りたら百万年は戻れませんから～、その間私たちを頼みますね～。特にゼウスちゃんを…」

…は？何を言ってｒ
ゼウス「喰わせろ！奪わせろ！襲わらせろ～！」
御乃那「あぶっ！！コイツ化け物か！？」
気絶していたにも拘わらず急に襲いかかって来やがった。
ゼウス「うるさい！！さっさと私を喰え！！そして私に喰われろー！！！！」
オーディン「私もヤるわ～。」

ちょ！待って！ゼウスは対処できるけどお前はまだ模範してないって、あっ！

その後、結局オーディンの乱入により…俺は拒否権の無いままに…俺の初めては無様に喰われてしまった。失神するまで喰われたとだけ書いておこう。

第二録　別れは寂しい、その分のプラスは帰ってくるけど。（後書き）

主人公は反則的にモテます。
前回八十とチョコを貰ったって書きましたが…
チョコを渡そう→別の女が邪魔だ→妨害してやろう
と、こんな感じで勝った人だけがチョコを渡せたので八十個しかない
のです。
あと、ゼウスとオーディンは主人公に惚れています。

あとがきの後書き　　早くパルシィを出して修羅場にしたい…

第三録　子供は大人よか腹グロ（前書き）

短いです。

ただそれだけ…。

第三録　子供は大人よか腹グロ

ゼウス「なん…で……

子供が出来ないの～～～！！」
御乃那「うるさいぞゼウス、昨日は酒を飲んだから頭に響くんだけど…」
ゼウス「あっごめん」

今までの状況を簡単に言うと
俺喰われる
←
酒飲む（自棄酒）
←
今現在の状況

ゼウス「うぅ～、あれだけヤったのに～、ねぇもう一回しない？」
御乃那「嫌に決まってんだろ、さっさと帰れ…夫だか何だかは別良いから寝かせろ。」
ぶっちゃけ誰かとそう言う関係になるかと思ってたし…

ゼウス「えっ…ホント…？」
御乃那「ホントだよ。」
ゼウス「ホントのホント？」
御乃那「あぁそうだよ。」

ゼウス「本当は…？」
御乃那「しつこいな！本当の本当だよ！お前の夫になってやるって！」
ゼウス「やっっっったぁー！！！！！」

はぁー疲れる…あれ、そういえば

御乃那「なぁ、オーディンは？」
ゼウス「…あぁ、あの子ならさっき『子供が出来たの～♪』って、言って今帰ってる…。」
御乃那「そうか…」
となると俺はオーディンとも夫になったのか？…いや、一方的とは言え、責任は取らなきゃな…
ゼウス「あの女…私よりも先に授かるなんて…今度殺して、残ってる目玉を抉り取らなきゃ…」
御乃那「リアルにやりそうだから止めろ、しかも彼奴、片目しかないから、とったら何も見えないぞ…」
ゼウス「アハハハハ、しないしない。殺らないから安心して（さぁ～て、どう殺すか…）」

御乃那「ヤンデレはそう言うんだ、俺は信じないぞ、帰って空鍋があったら、お前ヤンデレ決定だからな」

ゼウス「ひどい！ゼウスは御乃那を信じてたのに、御乃那は信じてくれないの！？」

御乃那「は……Ｙｅｓ！！」

ゼウス「言い直しているけど、二つとも同じだ！？」
オーディン「ただいま～無事に産まれたよ～」

御・ゼ「早っ！！」

御乃那「早すぎるだろ！？おかしい、おかしい、おかしい。」
ゼウス「子供…可愛い子供…貴方の子供は私のもの、私の子供も私のもの…」
御乃那「落ち着け、俺以上に」
スパァーン
ゼウス「うぅ～そのハリセン何処から出したの～。」
御乃那「企業秘密だ。…ところで、子供が出来たのは昨日だろ、なんでこんなに産まれるのが早いんだ？」

オーディン「他の神に手伝って貰ったんだよ～ショチケツアルとかトートとかベスとか…」

ゼウス「ねぇ～私にも子供頂戴よ～」

オーディン「いいよ～今二人居るし～」

御・ゼ「えっ！？双子！？」
オーディン「みんな来て～」
御・ゼ「既に来てるのかよ！？」
「「母上～父上～！」」

御乃那「あっ以外に可愛い」

「「死ねぇぇ！！母上の敵めぇぇ！！」」

ドス！ドス！ドス！
ゼウス「ゴバァ！！」

御乃那「何やってんだこの子達！？」

「「待っててね、母上。父上と母上の生活…もとい性活を邪魔するコイツを今殺すから！！」」

御乃那「何なんだよ！！この展開～！！」

新たな家族に踊らされる御乃那であった、後半へ続く。

第三録　子供は大人よか腹グロ（後書き）

オーディンの二人の子供は後々重要になります。ちなみに女の子です。

Qオーディンの子供って男の子じゃないのかよ！！

A親のオーディンが女だからオッケーかと…

では、また次回に…

第四録　近所に聞こえる悲鳴って無視しますか？ｂｙ湯飲みの茶（前書き）

久々にこっちです。

御乃那ファミリーが異常なほど

チートです。

第四録　近所に聞こえる悲鳴って無視しますか？ｂｙ湯飲みの茶

御乃那「で？こいつらの名前は？聞いてないけど…」

オーディン「陰ちゃんと陽ちゃんだよ～」

御乃那「どっちが陰でどっちが陽だ？」

オーディン「黒が陰ちゃんで白が陽ちゃん～」

ふむ、この帽子が黒な子が陰で帽子が白いのが陽なのか

陰・陽「「宜しくお願いします！父上！」」

御乃那「ああ、宜しく。で、知ってると思うけど、このお腹を押さえて寝てるのがゼウスだ…」

陰・陽「「……ぺっ！」」

ピチャ！ゼウス「殺す…殺す…殺す…殺す…私の”天候を司る程度の能力”で絶対殺す…」

陽「ねぇ、あの生ゴミ…私達を殺すってさ…」

陰「無理に決まってるのにね…ねぇ陽？」

陽「なに？」

陰「今の内に、母上の邪魔するゴミはゴミ箱に入れるべきだと思わない…？」

陽「そうだね！善は急げ！！って言うしね！」

陰「うんうん、やっぱり雑草はめんどくなる前に刈り取らなきゃ！」

ゼウス「死ねぇぇぇぇ！！」

ゼウスの手から雷だと思われる物が二人を襲った

…まぁ死なないから別に良いや、っと俺は思い無視する事に決めた

陰「無駄無駄、私の能力の”奪う程度の能力”と」

陽「私の”壱と零を司る程度の能力”には」

陰・陽「「絶対勝てないって」」

ゼウス「知るかっ！！さっさとその薄汚ぇ■■■を■■■に■■■■■して貰えよっ！！！！」

陰「だってさ、陽」

陽「そんなこと言われても…私達は■■■■■■されたいのは、その…ち…父上だけだと…／／／／／／」

ゼウス「・・・」

オーディン「・・・」

陰「／／／／／／」

陽「／／／／／／」

御乃那「／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ゼウスとオーディンが俺と陰と陽を見て、陰と陽は恥ずかしく赤面し、俺は心のライフが０になり、…もう、死にそう…

オーディン「…ゼウスちゃん、今回はあなた側に付くよ〜、私の娘だと思って油断してたよ〜、いや、これは御乃那さんのフラグ体質の仕業かしら〜…」

ゼウス「御乃那は私の物、御乃那は私の物、御乃那は私の物、御乃那は私の物、御乃那は私の物・・・・・」

オーディン「じゃあ、私は”全を見透かす程度の能力”を使って援護するから〜」

その一言を放った瞬間戦闘が始まった

〜その７２時間後〜

御乃那「言いたいことは！！」

「「「ごめんなさい！！だから許して！！」」」

ゼウス「…私ですする？」

御乃那「黙れ」

ゼウス「はい…」

陰「うぅ～、父上強すぎ…」

陽「なんで私達の能力を…」

御乃那「オーディンから聞いてないのか？俺の能力は”見た者の模範に成れる程度の能力”だ、お前等の能力は使えて当然」

陰・陽「えっ！？じゃあ、近親だけじゃなく、教師と生徒の禁断の行為も可能…「死にたいのか？」」

陽「た、たとえ死んでも、私は父上と「ちょっとあっちに逝こうか？」えっ？まさか大人の階段を登らせて…」

俺は陽をとある場所まで連れていった

陰「遅いなぁ～陽、まさか本当に大人の階段を…！？」

『イヤァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！ゴメンナサイ！！！！！もう許し…イヤァァァァァァァァァァァァァァ……』

ゼウス「・・・」

オーディン「・・・」

陰「ガクガクブルブルッ！！」

ゼウス「これからは、御乃那を怒らせないようにしましょう」

オーディン「そうね、わかった」

ゼウス「伸ばし棒忘れてる」

オーディン「忘れるわけないよぉ～」

その後、調教(きょういく)された陽は、
普通の状態で帰ってきたが、
御乃那を見ると途端に顔を赤らめる、
しかし、別に大人の階段を登ったわけではない

第四録　近所に聞こえる悲鳴って無視しますか？ｂｙ湯飲みの茶（後書き）

やっと終わった…

次回は諏訪子と神奈子が出てきます

作者は修学旅行で八坂神社に行きたかったが、
行くことは出来なかったｏｒｚ

諏訪大社には絶対行きたい…
でも八坂神社にも行きたいです…

では、（・ω・）ノシ

第五録　雨の日に子供が泣いてるのを見ると酷く悲しくなりますｂｙ湯飲みの茶

お久しぶりです。

謝罪は活動の方に書いてあります。

今回は久しぶりに書いたのと西尾維新の影響で少しおかしくなっていますが…では、どうぞ。

第五録　雨の日に子供が泣いてるのを見ると酷く悲しくなりますｂｙ湯飲みの茶

〜回想〜

あの日から、ものすごい時間が過ぎた…

あれから、色々あった…

たとえば、地上に大きい神社をオーディンが建てそこに家を引っ越したり…

陽が神界から鞭だの鎖だの色々持って来たり…

陰が部屋にこもり『打倒！！ゼウス！！』と毎晩叫びながら変な物を作っている、

チラッと見たが丸い球体を二つ作っていた…

ただ…一番驚きなのが…

ーーゼウスと俺の間に子供が出来たことーー

あの日は大変だった…

オーディンは何とも無かったが、陽は完璧にアンチフォーム（俺命

名）に成り、
陰は試作していた札を出していたが…アンチ・・・怖っ！！！！
と言うわけで、そんなこんなで色々時間が過ぎてった…
ちなみに、ゼウスの子供は”男”だ…
ただ、何でか”男の娘”なんだ…

思ったことを言うと、男では無い、あいつは…
そのおかげでゼウスはあの子に名前を付けた、”イェフ”神の子としての名だそうだ
…話が外れたな……
とりあえず、今は人間に妖怪等が居る頃、神様等が信じられた弥生時代…”の”ほんのちっょと前の話だ…回想終わり

御乃那「…また、あの子か…」
俺は今、神社の屋根から賽銭箱の前に居る子供を見ている…
外見からして、ほんの5～6歳位だろう
別にそれだけだったらどうでも良かったんだが…

雨の中、一人でジッとしている子を無視できるだろうか…しかも、何日も…何日も…

陽やゼウスからはあまり人と干渉するなと言われているが…

正直、我慢の限界だ

御乃那「お～い、そんな所で何やってんだ？風邪引いちまうぞ？」

？？？「待ってるの」

御乃那「？待ってる…？？」

？？？「うん…お母さんとお父さんを」

御乃那「…まぁ、とりあえず、風邪引くからこっちおいで、体拭くから」

？？？「ここで、待っててって言われた」

御乃那「…はぁ」

何というか…めんどくさい…

この際だから能力使おう…

御乃那「能力固定・所有者確定・天候を司る程度の能力」

ーー晴れろーー

そう願っただけで、そこら一帯の雨雲が一瞬で散った

…ただ、これ言わないと程度の能力使えないんだよなぁ
筋力とかはそのまま自由自在なのに…

???「っ！？」

あまりの事でビックリしてんな、とりあえず…

御乃那「じゃ、髪を拭くぞ～」
???「っ！！」

…おい、何故逃げる……

あれか、俺が子供を見ると興奮する変態とか思ってるんじゃないだろうな…
『違うよ！たとえ変態だとしても、変態という名の紳士だよ！』なんて事は言わねぇ

とりあえず、逃げる子に向かってタオルを投げる

???「…何？これ？」

御乃那「それで髪ぐらい拭いておけ」

???「…うん」

～数分後～
御乃那「よし！拭き終わったな、軽い自己紹介だ、俺は御乃那一斗
まぁ、御乃那って呼んでくれお前は？」

???「洩矢諏訪子…です」

御乃那「そうか諏訪子ちゃんね『どっかで聞いたことあるなぁ』」

諏訪子「あ…あの、これ…」

そう言ってさっき渡したタオルを渡してくる…

御乃那「あぁ、サンキューっと、ともかくこんな時間だ、家に家族は…て聞いても無駄かな…飯くらい食ってけよ、良いもんは無いけどな」

それを聞いた諏訪子の目がキラキラ☆q☆こんな感じになっている

諏訪子「食べ物！！」

あぁ、もうどうでも良いや、家にある蓄え全部食いそうなタイプだこいつ…

御乃那「はぁ～もう家にあるもん全部食ってけ…」

諏訪子「やった～！」

ただ、まだ知らなかった

まさか、俺のせいで、諏訪子が殺されるなんて…

第五録　雨の日に子供が泣いてるのを見ると酷く悲しくなりますｂｙ湯飲みの茶

…やってみたかったんですよ、最後のシーン

では、お便り…と言うか質問コーナー

まぁ、一つしかないんだけど

パワード・マウンテン様より

『好きなモノ……ありますか……？』

ん～、好きなものは…あれだう〇い棒、特にサラダ味

微妙に旨い…サクっサクっサクっ…

あっ次回は諏訪子を入れた日常編になるかと思います。

では（・ω・）ノシ

第六録　この前、諏訪湖と諏訪子を間違えた…ｂｙ湯飲みの茶（前書き）

……えっ！？これ諏訪子！？

自分で書いてて分からなくなった

第六録　この前、諏訪湖と諏訪子を間違えた…ｂｙ湯飲みの茶

諏訪子「わぁ～～！！真っ白いご飯！！それも、いっぱいだぁ～～！！これ全部食べて良いの？」

御乃那「お前、一気に性格変わったな…まぁ、量が結構あるし、おかずも有るから好きなだけ食え…」

そして、諏訪子は料理に目を向けるが、不思議そうにあるものをこちらに向けてきた

諏訪子「この茶色っぽいのってなに？」

それは”味噌汁”だった

御乃那「あれ？このときまだ味噌汁って無かったっけ？」

諏訪子「味噌汁？」

御乃那「あぁ、それは味噌汁って言うんだ…具は油揚げと豆腐だ」

諏訪子「油揚げ…？豆腐…？」

御乃那「細かいことは気にするな」

諏訪子「そうだよね！いただきまーす！！」

諏訪子は箸で上手に米を取り一口ご飯を食べた

…だが次の瞬間に

諏訪子「うっうぅぅ（ぽろぽろ）」

泣き出した…

御乃那「お、おい！どうした！？ひょっとして不味かったか！？それのせいで泣いてんのか！？」

諏訪子「（ふるふる）」

御乃那「じゃ、じゃあどうして泣いてるんだ！？」

諏訪子「美味しすぎるから泣いてるんだよ～～～っ！！」

御乃那「はっ？」

諏訪子「うううぅ、こんなの食べたらもう普通のご飯なんか喉通らないよぅ～～」

御乃那「そんな事無いだろ…これでも昔、お前の料理は酷いから出て行け！っていわれた事もあるんだぞ？」

注意・この時の酷いは、あまりにも美味しすぎた時の酷いであり、決して不味い意味での酷いでは無い

そのころ諏訪子の脳内では…

1（理性）『ううぅ、どうしよう』

2（本能）『とりあえずお茶でも飲めば？』

3（本能）『あっ！私もお茶！』

4（本能）『私も！！』

1『あんたら何しにここ居るの！？ちゃんと考えてよ！！もう普通のご飯食べられないんだよ！！』

5（欲望）『じゃあ、ここはあえて…』

2～5『ヤッちまうか！！』

1『何言って…えっ？ヤッちまうって？』

5『おいおい、マイシスター、これを考えてるのはあんたの本人だぜ？わかるだろ？』

1『ふぇっ？……／／／／／』

5『おっと？これは…？』

2～5『ヤッても良いとのことか！？』

1『だ、ダメ！！／／／／／』

5『（ちっ…もう一押しか…）考えてみろ1…ヤッちまえばあいつの料理が食べ放題』

1『！？』

5『しかも、食べ放題だから議題の普通の料理が食べられ無いをクリアーできる』

1『……』

5『大丈夫だよ…母さんや父さんだって、どっか行っちまったんだろ？寂しかったんだろ？…ほら、目の前にそれを埋める人が居るよ？』

1『！！』

5『さぁ、理性を語るなんてしないで、さっさと本能のままに、欲望のままに動けば？』

1（大欲望）『もうヤッても良いよね♪』

2～5『（良しっ！！）』

と言うような会議が行われていた…

諏訪子「ふふふ…食べ放題…」

御乃那「おい、本格的に頭がおかしくなってるぞ」

諏訪子「食べ放題…そしてヤリ放題…ふふ、アハハハハ」

御乃那「…はぁ～、またか…めんどうだ…」

諏訪子「ふふふ…ヤリ放ｄ（ボキッ！！）い……（バタッ…）」

御乃那「……」

イェフ「やった～！！ついにお父さんの首をやってはいけない方へ曲げた～、これで…ぐふふふふ～～～」

御乃那「馬鹿！！おまえ！！」

イェフ「あれ？お父さん？あっ！もしかして、首を折った衝撃でついに扉を開けたんだねぇ！！良いよ！ベットで待ってるから☆」

御乃那「ちげーよ！！これお客！！お前が殺ったのお客！！」

イェフ「……てへっ☆」

御乃那「ちょっ！！お前！！」

その後、なんとか諏訪子の首を直し、二人に襲われそうになったが…今の俺には意味がないんだぜ☆
まぁ、その後諏訪子は、家族は居ない孤独なんだ…と俺がゼウスとオーディンに話した所、なんと娘として家に居ることが決定した！！
その分、代償が大きかったけど…腰が痛いよ～神様助けて～
ゼウス「呼んだ？」
呼んでない、呼んでない。
まぁ、こんな所で話を終わるか、じゃ！！

？「例の計画は進んでいるか？」
？「えぇ、進んでますが？」
？「ふむ、ならよろしい。ははは、まったく面白い…」
？「何が？面白いのですか？」
？「この計画だよ…実に面白い…下手をすれば、あの御乃那とやらは死んでしまうが、成功すれば…まぁこれは言わんでおこう…」
？「？？？…そうでございますか…」
？「ああ、その為にも…

ーーこの諏訪子とやらには死んで貰うがなーー

第六録　この前、諏訪湖と諏訪子を間違えた…ｂｙ湯飲みの茶（後書き）

？←にしてるのは覚えなくても良いです…
あんま意味ないですから…

ではまた！（・ω・）ノシ

第七録　大切な物や者を無くした悲しさや苦しみは語るのは出来るはずがない…

やっぱり思う…長いなぁ～（タイトルが）

あっ、本編書けました！！

コナン君を見てるみたいにすれば自然と何でこうなったか分かるはず！！

第七録　大切な物や者を無くした悲しさや苦しみは語るのは出来るはずがない…

御乃那「おいおい、そんなにはしゃぐと転ぶぞ！」

諏訪子「だって久しぶりの里なんだもん、それ位許してよ～」

御乃那「たくっ…良いけど転ぶなよ」

今日は神社から出て諏訪子の住んでいた里に二人は来ていた…

ちなみに、諏訪子が家族になってからもう、四年の月日が経っていた…

諏訪子「…ねぇ、お父さん……」

御乃那「なんだ？どうした、そんな顔して…」

諏訪子「お父さん…ううん、お母さん達も…不老不死だから死なないんだよね…」

御乃那「あぁ、そうだな」

諏訪子「…わ、私は…お父さん達みたいに不死じゃないから…死んじゃうんだよね…」

御乃那「…そうだな」

諏訪子「そしたら…お父さんは悲しい？」

御乃那「…そんなこ決まってるじゃないか…”わからない”ってね…」

諏訪子「…どうして？」

御乃那「わからないぐらい悲しくて苦しいからだよ…」

諏訪子「……そっか、じゃ！そうならないように今から、ネップリと…」

御乃那「ちょっと待て…なんでそんな話になるんだ！？」

諏訪子「この前母さん達が…『あの人とヤレれば一生一緒に居られるわよ』って…」

御乃那「あいつら…（泣）俺を眠らせない気か！？最近どうも、陽と陰、それにイェフから……」

諏訪子「ねぇ～別に良いでしょ！！」

御乃那「駄目だって！！…ちょっ！！押すな！！ここ足場悪いから！！うわっ！？」

ドサッ！！

諏訪子「／／／／／／」

御乃那「……（汗）」

諏訪子「／／／／／／」
スゥゥ…
御乃那「無言で顔を近づけるなぁ～！！」

その頃、神社では…
???「ハハハハハ！！これが神様…て奴の力かよ？…雑魚過ぎるな」
ゼウス「陽っ！！陰っ！！イェフっ！！オーディンっ！！」
???「御乃那って奴が一番強いって言うから…そいつが出かけてから狙って来たが…居ても変わらねぇ～と思うな…ハハハハハハ」
ゼウス「くっ！！貴方どうやって！？」
???「どうやって…てのは、気配も無くこいつらをやっつけたって事か？駄目だよ？主語を抜いちゃ…」
ゼウス『うぅ…この怪我が無ければ…』
???「まぁ、教えといてやるよ…俺は犯罪者だったが…まぁ俺の一撃に耐えた褒美だ…」
ゼウス「随分…気前が良いのね…」
???「どうでも良いだろ…俺の名前は力道元（りきどうはじめ）…てめぇら化け物と

は違い人間だ…能力は…

ーー力の場所を替える程度の能力ーー

この日、とある神社では5人の神が消えたと言う…

その神社は幾つもの傷跡があり

それを、何も知らず帰った男が発狂し辺り一面を草木も残らぬ程に

壊し回ったらしい…

第七録　大切な物や者を無くした悲しさや苦しみは語るのは出来るはずがない…

活動報告に書きましたが…

マイペースは俺の兄！！

何卒、兄弟共々よろしくお願いします…。

第八録　神の居場所、笑いの居場所（前書き）

どうも…

お久しぶりです。

今回、主人公の第一章が終わる…そして始まります

章が書けない…だってＰＳＰ何だもの

ではどうぞ！

第八録　神の居場所、笑いの居場所

元は青く輝く大きな水晶の前にいた

元「は、ははは、はははははは…
後、二人……一人はどうでも良いとして、
こっちの奴を殺せって命令だったたな…
これが終われば…俺は自由だ…」

元は水晶に触れ…こう言った

元「てめぇらの、夫が来れば…俺は……自由だ……」

～～～～～～～～～～～～

諏訪子「お父さん…」

諏訪子が見たのは髪の毛が黒から白に変わり、焦点が合わない目をした御乃那だった

御乃那「……大丈夫だ…まぁ、後５０時間ぐらいだけどな…」
御乃那はそう言い、手の中から数粒の薬を取り出した…

御乃那「諏訪子…悪いけど、里で留守番しててくれ…」

諏訪子「えっ…どこに行くの？まさか…」
御乃那「あぁ、その通りさ…ゼウス達の仇を取りに…」
諏訪子「ダメだよ！！相手が誰なのかも分からないんでしょ！！」
御乃那「そうだよ…でも俺には約二日しか時間がない…行くしかないんだ…」
諏訪子「だったら…だったら私も！！」
御乃那「それこそ駄目だ…仮にもゼウス達を殺した相手だ…俺でも諏訪子を守る事が出来ない…」
諏訪子「…私達は…家族だよ？…父親の役に立てなくて…家族の役に立てないのは…家族じゃないよ！！…私は…お父さん達の…お母さん達の娘だ！！お父さんが死んだら、私独りぼっち…そんなのはイヤだよ！！」
諏訪子の目からは涙…
大粒の涙がこぼれていた…
御乃那「……やっぱり、連れて行けない…」
諏訪子「なん…で…」
御乃那「分かってくれ、諏訪子…お前は俺にとって…
いやゼウス達にとってもだ…
お前は…俺達の娘なんだよ…
大事な娘の一人だ…
だから…連れて行けない…

分かってくれ…」

諏訪子「……」

諏訪子は黙り込み、さっきより大きな涙を流している…
それは、嬉しさではなく…当然、悲しみの涙だった…
役に立てない…父親が困ってる時に役に立てないなんて…

そんな事を思ってる時だった

元「へ～…おっせーから来てみれば、こんな所にまだ居たんだ…」

御乃那「誰だ…」

その男は仮面を被っていて目は見れなかった

元「そう睨むなって…痛くも痒くもねぇんだからよ…
折角来てやったんだぜ？
あっ、俺は力道　元な
それと…今、第一目標が居るからお前はいらねぇ」

元は指を指しそう言った…

その指は…諏訪子に向けられていた…

御乃那「そうなる前に！！」
背中にあった弓を取り出し
神力で作った弾を元に打った…
元「無・駄☆」
が、その弾は元に当たった瞬間消え失せた…
だが、元の隣にある木がまるで何かに当たったかの様に…

無様に消えていった…

御乃那「！？…諏訪子！！逃げろ！！」

諏訪子「う…うん！」

返事をして、諏訪子は逃げだそうとしたが…

元「あぁ、俺の能力…力の場所を替える程度の能力って言ってな…
あらゆる…つっても、全部は無理だけどな…
こんな事は出来る…」

フゥワ！っと元は手から弾を作り出し…それを
おもいっきり自分の足に当てた…

だが…

バキッ！！

諏訪子が足を不自然に折れた…

御乃那「！？」

元「力を移動させる…つまりは、俺が車に引かれそうになるだろ？
その時の”衝撃”って”力”を…いや”力”だけを好きな場所に”
替える”事が出来る…
ちなみにお前がさっき俺にやってきた攻撃をあの娘にやったら…」

御乃那「！！……。」

元「あっ！逃げようなんて考えても無駄だぞ？
ちなみに、言っておく…
逃げた瞬間、その娘を殺すぞ？」

御乃那「……」

詰みだ…
俺から手は出せない…逃げても無駄…
俺が…一歩動くだけでも…

元「いや～、そこの娘…えっと～、あぁ、そうそう諏訪子ちゃん！
邪魔に成っちゃったね～…役に立つどころか、もう…は、ははは
は！！
やっぱり対したことねぇな！！

あっ、そうだ良い事考えた！！たしかここに…」

そう言い、元はポケットから小さなナイフを取り出した…

御乃那「おい…まさか…」

ーーあ・た・り☆ーー

ザシュッ！！と肉が切れ血が出る音が、妙に長く大きく響いた…

元を見ると…

元は自分の胸の中心にナイフを刺して…

いや、突き立てていた…

音がしたのは…肉と血の音がしたのはこっちじゃない…

後ろ…諏訪子の倒れていた方を見る…

そこには胸から血を流し、金色の髪が赤く、紅く染まっていた…

『死とは何だ…』

死……頭の中でそんな言葉がよぎった…

死…それは痛く苦しく悲しく怖く…

死…それは誰もが味わう筈のもの

俺は？…不死だ……

諏訪子は？…聞かなくても分かる…

『では、もう一度聞こう…

死とは何だ？』

死…それは悲しく『違う』！？

『聞け、死とは…０であり零であり、無いであり、無である…』

『どれだけ人を救おうが、どれだけ善なる行為をしようが…最終的には０で零で無いで無なのだ！』

『お前の中にいる私は式が１＋２だろうが１０００×１０００だろうが－１＋（－２）だろうが何であろうが、０に、零に、無いに、無に出来る！！』

『我に体を貸せ…別に乗っ取ろうとは思わない…

ただ私は、式を操り、無にする者だ…』

『そうか…では拝借しよう…私の力を見せるために…』

元「はっはっはぁ！！さすがに目の前…いや後ろだが…手の届く範囲で娘が死ぬのがショックだったか？

まぁ、良いさっさと殺しｔ（バキィィッ！！）ガッ…アァ……」

元「チッ！何だこいつ！？俺に攻撃を！？当てられないはず！？」

御乃那？『自己紹介をしよう、私は御乃那　一斗では無い誰かだ…まぁ名前を付けるならユアだ”ｙｏｕｒ”のユアだ』

元「あぁ？！てめぇはてめぇだろが！！」

ユア『否、私は御乃那の逆だ…御乃那が＋だったら私は－なのだ…ただ私が御乃那の体を借りるときは…何だろうな？０、零、無い、無…そのような存在になる』

元「良くわからねぇんだよ！！」

ザシュッ！！

また、肉の切れる音と血の音がした…

しかし、今回は…

元「ガッ…何で俺がぁぁぁ！！？？」

ユア『貴様の能力は受ける相手が居れば…つまりは”存在していたら”の話だ…さっきも言っただろう…

私は０で零で無いで無だ…とな……』

ユアはそのまま元に歩いてゆく…

ユア『ちなみに、何故かと言うと…我は”式を操り答えを無にする程度の能力”がある…

まぁ、私に式が無いから御乃那と言う式が無いと使えないがな…』

元「助けてくれよ！な！な！娘殺したことは謝るから！助けてくれよ！」

ユア『ふむ…どうする？御乃那…ほう助けるのか…』

元「ありがとう！！だから早く！！もう血が！！」

許して貰えたと思えたが…

しかし…

ユア『嫌だ…消えろ屑！！』

ボシュ…

軽い音を立て元という”存在”は綺麗に消え去った…

ユア『御乃那が許すと言ったのは嘘だ…家族を奪われた者を許せるわけが無いだろう…
ふむ…そろそろ返せとな？
あい、わかった返そう…』

バタッ…
ユアから俺に変わった時、俺は泣いていた…

家族を全員失った悲しみにより…

ゼウス…オーディン…陰…陽…イェフ…諏訪子…

全部失った…

諏訪子を守れなかった…
みんなを守れなかった…

しょうがない…せめて諏訪子の墓位は作って謝ろう…

そう思い、諏訪子の遺体に目を向けるとっ！！

ギョロギョロ
諏訪子「……」

目玉が二つ付いている帽子を被った諏訪子が居た…

御乃那「…諏訪子…だよな？」

諏訪子「お父さん…だよね？」

それの確認を終わった瞬間
俺は諏訪子を抱きしめた…
逃がさないように…取られないように…

諏訪子「ちょ…苦…苦しいって！！」

御乃那「あっ、すまん」

逃がさないように抱きしめたのは13秒だった…

御乃那「…諏訪子、どうしてお前生き返ってんだ？」

諏訪子「あぁ、何か死んだら、最高神って人がいて…」

『巻き込んでごめんなさい…元の世界に戻すついでに神様にしてあげたわ…夫の事を宜しくね？』

諏訪子「て言われた」

御乃那「…今度…礼を言っておくか……さぁ～て、直す所も一杯あるな、まず神社直さなきゃ」

諏訪子「あ！言い忘れた…お母さん達生きてるよ」

御乃那「ふ～ん、そーなのかー…あ？…今、なんて言った？」

諏訪子「だから、生きてるって、最高神って人が言ってた～、閉じこめられてんだって～」

うん…まぁ…あれだ…

こうして（ガシィ！！）こうして（グリン）こうだな（グリグリグリグリ）

御乃那「なんで、早く言わないんだよぉ〜！！」

諏訪子「痛い！痛い！痛い！痛いところが痛い！！
お父さん！私、陽じゃないから痛い〜〜〜！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜

？？？「申し訳有りません！！最高神様！！もう既に最初を除いた
五体を世界に落として仕舞いました！！」

最高神「はぁ〜、もう良いわ…」

？？？「しかし…！！」

最高神「貴方は、善意で送ったのよね？なら良いわ…下級に中級、
それに上級まで…力を合わせ六柱の転成者を作ったのね…それも最
後のは…御乃那と同レベルの…御乃那…」

ーーー生きてーーー

第八録　神の居場所、笑いの居場所（後書き）

ご質問、ご感想、ご指摘待っております。

では、（・ω・）ノシ

番外本編録　豆腐の角に頭ぶつけて死んじゃえ♪ｂｙ……（前書き）

自分でも何を書いているのやら…

展開がおかしいと思いますが…

”生暖かい目”で見守って頂きたいです…ではどうぞ！！

番外本編録　豆腐の角に頭ぶつけて死んじゃえ♪by……

これは力道元が死んでから数年経った時の話…

チュン、チュン…

御乃那「ふぁ～…あ…良く寝たなぁ…
みんなはまだ寝てるのか…
…うん、飯作ろ……」

まだ、朝五時…御乃那家の御乃那以外しか起きていない時間にそれは起こった…

御乃那「手始めに味噌汁でも作るか…
確かここに包丁が…！？」

ぐにゃ～ん…

…何だこれ……ほ、包丁が…

ぐにょ～～ん…

御乃那「……いや、いや、いや…こんなスライムみたいな包丁は無いはずだ、
また諏訪子とイェフのイタズラだな？」

そう思いスライム包丁を投げ捨てようとしたとき…

カチンッ！！

御乃那「！？」

な、何だ！？急に包丁が…

？？？「あはははは！！イタズラ成功～～～！！」

御乃那「…そこかっ！！」

？？？「わわっ！！」

ガシッ！

御乃那「？…能力持ちの……子供？」

？？？「あらら～…捕まっちった～～…」

…ちっ、こいつはゼウス達に任せるか……

子供はイェフと諏訪子だけで十分だ…

？？？「でも～…くちゃ～～…」

御乃那「！！！？？？」

な、何だよおい…これって……

？？？「あはは～、くちゃくちゃに成っちゃった！！」

体がスライムみたく…

いや、これって骨が柔らかく…

???「カッティィン!!」

なっ!?さっきの包丁みたいに固く…

待て待て待て、こんなぺしゃんこの状態で固められたら…

ーー文字通り、手も足も出ない…ーー

???「あはは〜バイバ〜イ!!」

イェフ「貫った〜!!」

ゴキッ!!

???「キュッ!!」

イェフ「はぁ…はぁ…／／／／／こ…今度こそ寝込みを／／／／／」

御乃那「お前って何時も人を間違えて能力使うよな…俺起きてるし、あっ、助けてくれ…」

イェフ「あるぇ?…ど、どうしたの!?私、首折っただけなのに、こんなぺちゃんこに…」

御乃那「あぁ、これ俺の力じゃ戻らないから、一回俺を殺してくれ、リザレクションするから」

イェフ「む、無理だよ！私にお父さんを塵一つ残さないような攻撃なんて…」

御乃那「やってくれたら今日の飯、俺が食わせて「頑張ります！」頼む」

まぁ、口移しじゃないけどな…

イェフ「…良し、これなら…」

ーー信符『正直者ほど救われるのか？』ーー

イェフの手から全てを惑わす弾が千から一万まで出てきた…らしい……

だが…俺には見えない…見えるはずがない

あぁ、死んだのか…

やっぱり、あいつの能力が関係してんのか？

イェフの能力…

ーー全の攻撃を暗殺術を変える程度の能力ーー

いや～、あいつ凄いよなぁ…

俺を殺せるだけの技があるって…

最近だとゼウスにオーディンもイェフに殺されたからなぁ…

あいつは俺よりか強いと思う…

おっと、そろそろ生き返ろうか…

御乃那「………」

イェフ「はぁ…はぁ…はぁ…／／／／／／／／／／／／／」

諏訪子「はぁ…はぁ…はぁ…／／／／／／／／／／／／／」

神様…居たら俺を助け…あ…俺、神だった…

……何で二人に寝取られているのだろうか？

って、言うか何で俺は何時も寝取られるんだろうか？

…あれ？この場合寝取るって言うのか？

まぁ、いいや…とりあえず諏訪子達を説教しよう…

ギシッ！！

…は？

イェフ「？…あぁ、お父さん…やっと起きたんだね…
やっと、死んでくれて犯す事が出来たよ…
まぁ、一人邪魔な人がいるけど…」

御乃那「…なぁ、俺全然動けないんだけど…」

そう言い、俺は手足に付いてるもの見せた

イェフ「あぁ、それは天の鎖って言って”神性”が高ければ高いほど強くなるんだ…」

ドンドンドンッ！！

陰『早くドアを開けなさいッ！！』

陽『父上！！そいつよりか私の方が気持ちグエッ！！』

陰『何を言ってるのよ！！陽は！！』

イェフ「ちっ！屑共が来たか…フフフフ…今の僕だったら、あんな屑共の百や二百…全員の首を折れる！！」

陰『開けないんだったら！！陽！！行くよ！！』

陽『うん！！』

陰・陽『必然【奪う者は壱を零にする者なり！！】』

シュ～…

部屋を閉じていたドアを消しさり、陰と陽が現れた…

陰「さぁ！！」

陽「お前の罪を！！」

陰・陽『数えろ！！！！！』

イェフ「え～と、お父さんと間違えて殺しちゃたお母さん…確か…
７２回位で…
オーディンさんが８４回…
屑共は２３１回！！
やったね！！屑共が一番多いよ！！」

陰・陽「私達が殺されたのは２５５回だ！！」

イェフ「ついでにやった～！！
ついに！！屑共が屑だって認めたよ～！！」

陰「屑はアンタでしょ！！
このゲ○野郎！！」

陽「そうだよ！！羨まし…羨ましいよ！！」

イェフ「本音が隠せてないし！！隠れてないよ！！
なら…僕に勝負で勝ったら、お父さんを好きにすればいいさ！！」

御乃那「…なぁ、俺に拒否権は『ない！！』…」

陰・陽「…場所は？」

イェフ「当然…表に出ろ！屑共！！」

ヒャッハー！！！！

御乃那「あぁ～、脱出したいのに出来ねぇ～…
うぅ～、強いよ～天の鎖～…」

？？？「あ…あの……だ、大丈夫…ですか？」

御乃那「？…あぁ～、あの子供か～、ヘルプ…は無理か…
どうして、ここに？」

？？？「いえ…あの……その……わ、私の半妖がご迷惑を…その
……掛けましたので……／／／／／／／／」

御乃那「おい、どうした？」

？？？「ひっ！！…そ、その…あわわわわ……は、はぎゃ…裸なの
で……うぅ～／／／／／／／」

御乃那「これしか言えないが、すまない…」

？？？「い、いえ！！…べ、別にらいじょうぶ…です…／／／／／／／／

あ、す…すみません！！

こう成ったのも私のせ、責任ですから…

今、これ外しますね…」

子供が目を瞑り…手で触れるだけで…

天の鎖がスライムみたいに柔らかくなった…

？？？「えっと…それで……こうか…」

完全に俺の手と足から天の鎖が溶け落ちた…

御乃那「助かったありがとう…」

？？？「い、いえ…て、照れるじゃないですか…」

御乃那「ごめん、ごめん…あっそうだ…聞くけど、さっき、半妖とか何とか…後、名前は…」

？？？「ととと！とりあえず！！服を…着て…下さい……／／／／／／／／」

御乃那「おっと、すまない…」

～主人公着替え中～

御乃那「…で、もう一度聞くけど…最初に名前は？」

？？？「わ、私の場合は…ソルド…て言います…半人です…
あの子の場合は、ハルド…て言います…妖精の半妖です…
その…女の子みたいな名前じゃないですよね…」

御乃那「いいや、とっても可愛らしい名前だよ…」

ソルド「そ、そうですか？
そんな事は一度も言われたことがないので照れちゃいます／／／／／／／／」

御乃那「あっ、そうだ…あの能力は…」

ソルド「あれですか…
私は…の、能力を二つ…も、持ってるん…です…
”柔な物を堅くする程度の能力”…
”堅い物を柔にする程度の能力”です…」

御乃那「だから、包丁（堅い）がスライム（柔）になったのか…」

ソルド「す、すみません！！
本当だったら、ハルドはあまりイタズラをやらない子なんですが…
！！」

御乃那「あぁ…別に良いよあの位は…（イェフと諏訪子よりかはマシだ…）」

ソルド「本当ですか！？

あ、ありがとうございます！！」

御乃那「あぁ…偶に、ここに遊びに来い、歓迎するぞ？」

ソルド「はい！！」

諏訪子「はぁ…はぁ…これが放置プレイ…結構良いかm【それでは、また次回に！！】

番外本編録　豆腐の角に頭ぶつけて死んじゃえ♪ｂｙ……（後書き）

ちなみに、名前の決め方は分かると思いますが…

ハルド＝ハード（堅い）

ソルド＝ソフト（柔らかい）

です…

では皆さん、また次回に…

第九録　思い立ったが吉日！！まぁ自分はそんなの吉なんて無かったけど！！

ついに、二人の夢が…

タイトルにあんま意味は…な、いかなぁ～？

第九録　思い立ったが吉日！！まぁ自分はそんなの吉なんて無かったけど！！

朝…小鳥がさえずり、御乃那家は騒々しくも、朝ご飯を集まって食べていた…そんな朝の輝かしい日に御乃那は言った…

ーーーそうだ、教師になろうーーー

シーン…誰もがその言葉に恐怖した…

驚いた、ではなく…恐怖と言うのは何故かと言うと…

『絶対に…生徒全員が惚れるだろうな…』と

御「どうだ？」

御乃那が周りを見渡しながらそう言うが、もちろん…

全員『反対！！』

と、言われてしまった…

ゼウスとイェフが御乃那に抱きつき…

ゼ・イ「「絶対離さない絶対に離さない絶対に離さない絶対に離さない絶対に離さない絶対に離さない絶対に離さない絶対に離さない

…」」

と、息継ぎ無しで言っている…

ちなみに、オーディンと陽、陰は二人がみんなを押し出したために…

皆さんとっても怒ってらっしゃる♪

陰は懐から、あの丸い球体を取り出した…

オーディンは槍を取り出し…

陽は…ちょっと待て、待て待て待て待て待て！！

アンチフォームになってやがる…！！

御「イェフ！ゼウス！早く逃げ…」

陽「へ～…ふ～ん…そ～なんだ…

二人はとっても、私を怒らしたいんだね…」

ゼ「！？」

イ「どうしたの屑…？」

ちょっと待てイェフ！！

御「バカ！早く逃げるぞ！！」

御乃那はイェフとゼウスの手を取り、走って逃げようとした…だが、

それが間違いだった…

陽「キエロ…」

ピシッ！！

御乃那とゼウス、そしてイェフまでもが走るのを止めた…

いや、止めたのではない…出来なくなった…

イ「な、何だ…これ？足が全く動かな…」

陽「零にして上げたよ…父上に二人の動くことを…」

ーーー壱と零を操る程度の能力ーーー

陽「みんな狡いよね～、私なんて、いや私達は全然ヤってもらえないのに…

それを…それを！！イェフ！！テメェが父上をヤったせいで私達が寝込みを襲い難くなったんだよ！！」

御「いや、さすがに何回も襲われてるから警戒しないわけには…」

陽「姉さん…」

陰「なに？」

陽「連れてけ…」

陰「了解」

御「ちょっ！！待て！お前等！！来んな！！近づくなよ！！」

陰「母上はどうする？」

オ「ただ譲るだけは暇〜、だからシている最中見学してるよ〜」

陰「母上、なんか嬉しいことでもあったの？」

オ「久々の台詞〜」

陰「？」

陽「あ、姉さん父上の自由奪っておいて…ついでの人たちも…」

御「させるか！能力固定・所有者確定・壱を…」

陰「奪え♪」

ちっ、声を…

陰「１４時間が最大だよ…」

陽「うん…じゃあ、父上…？」

ーーーゆっくりと…犯してあげますね？ーーー

朝…何回も見慣れている朝日を、今回は別に見えた…

あの時から俺は気を失ったらしい…
陰のせいで１４時間フルでヤられたのに、寝ることを奪われたのだ…
はぁ～、死にたい…

もう、どうなっても良いので…
この際だから、全員に夜を誘った…
交換条件として教師になることを出したら、すぐに許しを得た…
さすがに、もう眠いが…
今、みんなで新たな家を作っているところだ…
昔の家…まぁ神社だが…
諏訪子が欲しいと言ったので譲った…
方針的には考えている…
勉強、特に薬剤系にしようかと…

あっ、ちなみに今は定期的に一人ずつ相手をしている
もちろん、諏訪子も加えて…
でも、諏訪子と陽がかなりハードなＳＭプレイを望んでくるんだが

…どうすれば…

あ、そう言えば…

現在俺は、一般人に使える武術を考えている…

名前自体は決まっている…

その名も…一斗流　練開基終(れんかいきしゅう)…

俺ながら凄い物だ…

まぁその辺で、このあたりで、こんな物でこの位で…

さよならです！

では！

第九録　思い立ったが吉日！！まぁ自分はそんなの吉なんて無かったけど！！

神子異変はもうちょい先です

感想ご指摘お待ちしております

第十録　強すぎるから使えないもの…（前書き）

とりあえず今はバトル無しです

次回にバトルです！！

注意！！火薬は危険ですので、ちゃんとした場所、服装、そして人が居ない場所では使ってはいけません！！

第十録　強すぎるから使えないもの…

新たな家が出来ました！！

看板には”教え小屋”って書いてあるけど…

今思えば…この時代に通じるのか？漢字が…

とりあえず、今俺は諏訪子に計算を教えている…

御「引っかけ問題だ…

太郎君は、今１７００円有りました、お米を４００円でかったらお釣りは幾らでしょうか？」

一応、諏訪子に円は教えてある…

諏「え～と、１、２、３…１３００円！！」

諏訪子は指を折りながら数え…答えを出したが…

御「ぶっぶー！！ハズレ、正解は０円だ、誰も全部のお金を出してはいない、４００円丁度を出したんだ」

諏「うな～…酷いよ～…」

御「だから、引っかけだって言っただろ？」

御「じゃ…次、実験な…

はい、これ」

諏「なに？これ？」

御「火薬と紙、ちなみに火薬はさっき渡した紙にも書いてあるからな」

諏「これどうするの？」

御「紙にこうやって火薬を入れて包んでこうすれば、線香花火の出来上がりだ」

諏「？？」

御「じゃ、水を張った桶の上でやるか、見てろよ…」

元々あった火に線香花火に近づけ、火が付いたら桶の上でじっと待つ…

パチ…パチパチパチパチパチ！

諏「うわぁ～」

御「綺麗か？」

諏「うん！」

そうか、そうか…

こうゆう時は可愛げあんのになぁ～

？「すみませ～ん」

御「ん？もしや、初の生徒さんか？」

諏「初生徒は私だよ」

御「そうだったな」
？「すみませ～ん」

御「あ、すみません！今行きます！！」

ガラッ！！
御「お待たせしました…
初めまして御乃那一斗です」

？「あっ、初めまして…私、鬼の凶鬼って言います…
早速ですが…」

私と戦って貰えませんか？

私は鬼だ…

しかも鬼の中でも一番強い鬼だ…

その結果…鬼の中でも強すぎるだけで私は戦ってはいけなくなった…

別に戦わなくたってお酒がある…堪えられると思った…

でも、そんなに簡単な話ではなかった…

満足できない…

戦いたい…

でも、私が戦えば、みんなが傷つく…

みんなは、私よりかとても弱い…

私は強い奴と戦いたい…

なので私は住んでいた山を出て…

外で強い奴を探した…

だが外に出たらさらに弱弱しい奴等…

これだったらみんなでやっていた方が面白いと思った…

山に帰ろうと振り返る…

視界に、ふと…人里のようなのが見えた…

！！？？なんだ！？あの気は！！これだ！私の戦いたい奴はそこにいる奴だ！！

やっと…やっと、戦える…

全力で、本気で、遠慮なく…

私は嬉しくなり走り出した
ここからあの人里までそこまで距離はない…

強い気を放っている家にたどり着いた…

その時、気づいた…

様々な気が混ざり合って一つになっていることに…

もしや、一人で発しているのではなく、相手は複数居るのではないか？

まぁ、そんなどうでもいい事なんて忘れよう…
そして、私はこれからの事と、人を呼ぶための言葉を発した

ーーーすみませーんーーー

ごめんなさい…その言葉と意味は違うが同じ言葉を…

第十録　強すぎるから使えないもの…（後書き）

あーうー…

次の投稿は、なのはとオリジナル書いてからだと思います…

あの、出来れば感想を貰いたいなぁ～と…

では…また次回…

第十一録　鬼と一緒に格闘試合（前書き）

書き終えました☆

ではどうぞ！！

第十一録　鬼と一緒に格闘試合

御「戦ってほしい？」

凶「えぇ、教え小屋と書いてあるなら物を教える…
つまりは武術もあるのですよね？」

御「いや、あるって言ったらあるけど…」

凶「でしたら、お願いします！！
私と正々堂々戦って下さい！！」

御「う～ん…どうする？」

諏「いや、私に言われても…」

御「そうか…だったら、三日後だ…」

凶「えっ？今戦わないんですか？」

御「今戦うと俺が万全じゃないんだよ…万全にするための三日間だ…
今なら細かい規則を決められるが？」

凶「では、お互い能力使用有り、刃物等の武具有りで、試合の決着
方法はどちらかが降参するまで、場所は妖霊山だ、お互い一体一で
の勝負」

御「了解」

凶「では、三日後に…」

諏「お父さん…」
御「何だ？」
諏「何で、三日後の約束にしたの？」
御「三日後の方がやり易いからだよ…
それに俺の練開基終はまだ試しはしてないからな…
その為だ…」
諏「…一応聞くけど、お母さん達に試すの？」
御「いや…さすがにオーディンと陰とイェフにはしないつもりだ…
もちろん諏訪子にもだ…」
諏「どうして？」
御「それは、試されたゼウス達に聞いてくれ…」
諏「うぅ～…」

～三日後、妖霊山にて～

山だから仕方がないと言ったら、仕方がないが…斜めっている…
戦い難いが、難しいと言うだけで余り問題はないだろう

場所にして山の中腹辺りだ

そこに鬼…凶鬼が居た…
その後ろにも沢山の鬼…

ただ、凶鬼以外の鬼達は目を瞑り震えていた…

凶「…待っていました、後ろの奴等は私の部下ですが、まず襲って来ません…
木や草と思って下さい…」

御「まぁ、分かった…
俺にも同じ様な奴等が居るけど気にするな」

凶「最初から気にしていません
そんな、傷だらけの人なんて…」

御「…まぁ、良いや…じゃ始めるとするか…
試合開始の合図は俺の娘の陽がやる…いいか？」

凶「不正をしない限りは…」

陽「じゃあ、試合開始の合図をさせて頂きます…
試合開始！！」

御「…一応名乗っておく…

一斗流一代目　御乃那一斗だ」

凶「…そう言えば自己紹介していませんでしたね…
鬼の頭…鬼神　不平(ふびょう)凶鬼！！
いざ正々堂々…」

しかし、その自己紹介が続くことは無かった…

ーーー練開基終　開之技奥義(かいのぎおうぎ)　開口一番ーーー

容赦無い素早い走りからの素手による突きの攻撃…

それに凶鬼は対応できなかった…

なぜなら…

開之技奥義　開口一番とは奇襲の技なのだから…

しかし、対応出来ないはずの凶鬼がそれを覆す様に…

ひらりと避けた…

御「は…？」

凶「っ！？…危なかった…
卑怯ですよ…不意討ちは…」

御「…いや、試合開始と言ってあるから卑怯ではない…
大体…攻撃しない方がおかしい…」

凶「…確かにその通りですね…」

いや、そんな事よりも…

御「どうやって、さっきの技を避けた…俺の能力だってそうだ…
なんで効かない…！！」

そうだ、さっきからずっと、視線を合わせようとしても、合わせられない…
開口一番も完璧に不意を突いたはずなのに、当たらない…

凶「…私の能力は、”振り分ける程度の能力”なんです…
貴方が必死に攻撃を当てようとしても、
私は攻撃力等から回避力に殆ど振り分けて貴方の攻撃を避けているんです…
貴方は私の目に何がしたいんですか？
さっきから私の目が何かに…いや、何かを見ないように避け続けているのですが…」

御「…つまり、今のお前には攻撃が当たらないんだな…
それなら、数で勝負だ！！」

凶鬼に近づき…そのまま奥義を繰り出した…

ーーー練開基終　基之技奥義　徒手空拳ーーー

ただの殴りや蹴り…正拳付きに裏正拳…
踵落としや回し蹴りなど…

知っている限り、幾らでも出すのが徒手空拳…

しかし、その数の暴力を少し慌てながら完璧に避けている…
そして再び、踵落としをした瞬間…
凶「はっ！！」
ガギッ…！！と凶鬼が繰り出した殴り一発で鈍い音がした…
御「ぐぅっ…！！」
奇襲でも駄目…数の暴力でも駄目なら…！！
凶「はぁ～…やはり貴方でも私の相手は勤まりませんか…」
はっ…？
凶「やはり、私は強すぎる…周りは私の足元にも及ばない…」

御「…やってやろうじゃないか…」
凶「？」
思いついた…攻略法を…
攻撃を当てる方法を…

御「能力固定・所有者確定・天候を司る程度の能力」

天の雷よ！！

突如、空に黒雲が出来…

雷を…無数の雷を降らせようとしている…

それを見て、これから何をするのかが分かった様に凶鬼は走り出した…

御「…勘が良いな、もう分かったか…お前自身の弱点が…」

凶「やられる前に貴方の所に行けば…！！」

そうだ、これは俺が居たら意味が無くなる戦法だ…

故に、広い妖霊山だからこそ出来る…

完全に攻撃を避けられるからと言っても…

全方位から隙間一つ無い攻撃をされたら…

ーーー避けようがないーーー

御「落ちろ…」

空を覆い尽くした雲から、雷が…隙間無く、遠慮無く、手加減無く降り注いだ…

一回目…
あれほどの雷を受けながら、ほぼ無傷で立っていた…
だが、それだけで終わるとは全く思っていなかった…

既に作って置いた黒雲でさらに雷を放った…

二回…三回…四回…五、六、七、八…と何回も落として放った…
何回も食らっても大丈夫なのは、多分、攻撃や回避なんかを全て防御力に回しているからだと思う…

御「けど…全く効かないわけじゃない！！」

徐々に凶鬼が膝を地面に附けた…

もう何百を越えて雷を放っている…
さすがに自身の限界が近い…

凶「グッ…！！グゥッ…！！
……ハァァァァ！！」

御「はっ！？」
なんと凶鬼が雷に打たれながら走ってきた…
凶鬼自身も雷に打たれ続け、体力の限界なのだろう…

これが最後の攻撃…

御「…良いよ、分かった…
じゃあ、試合(きょういく)を終わらそう…」
凶「喰らえぇぇぇ！！」
ーーー不平・激震ーーー
ーーー練開基終　終之技奥義　滅私奉公ーーー

まるで、地震の様に重い拳の殴りと…
その一撃に全てを賭けた、貫き通す拳の殴り…
互いにぶつかり合い…
弾けたが両方とも生きており…
相殺したお陰でダメージは無かった…
しかし、最初に動いたのは御乃那だった
一回目…
あれほどの雷を受けながら、ほぼ無傷で立っていた…
だが、それだけで終わるとは全く思っていなかった…
既に作って置いた黒雲でさらに雷を放った…
二回…三回…四回…五、六、七、八…と何回も落として放った…
何回も食らっても大丈夫なのは、多分、攻撃や回避なんかを全て防御力に回しているからだと思う…

御「けど…全く効かないわけじゃない！！」

徐々に凶鬼が膝を地面に附けた…

もう何百を越えて雷を放っている…

さすがに自身の限界が近い…

凶「グッ…！！グゥッ…！！

……ハァァァァ！！」

御「はっ！？」

なんと凶鬼が雷に打たれながら走ってきた…

凶鬼自身も雷に打たれ続け、体力の限界なのだろう…

これが最後の攻撃…

御「…良いよ、分かった…

じゃあ、試合（きょういく）を終わらそう…」

凶「喰らえぇぇぇ！！」

ーーー不平・激震ーーー

ーーー練開基終　終之技奥義　滅私奉公ーーー

まるで、地震の様に重い拳の殴りと…

その一撃に全てを賭けた、貫き通す拳の殴り…

互いにぶつかり合い…
弾けたが両方とも生きており…
相殺したお陰でダメージは無かった…
しかし、最初に動いたのは御乃那だった…

追い打ちに賭けた技は…同じ最終奥義の中の一つ…

ーーー練開基終　終之技奥義　満身創夷ーーー

体力が少なければ少ないほど…
”命中率”が上がる奥義…

その拳は真っ直ぐに…凶鬼の顎に当たった…

だが、それでも凶鬼は止まらず、もう一つの最終奥義を繰り出そうとした時…

グラッ…と、凶鬼の体が倒れそうになった…

御「おっと!?」

すぐに、抱き止め…倒れるのを阻止した…

凶鬼の顔を見ると…疲れ眠っていた…

陽「…け、決着!!
勝者!!御乃那一斗!!」

うおぉぉぉぉ！！と、鬼達が雄叫びを上げている…

『スゲェェよ彼奴！！』
『あの鬼神様を倒しやがった！！』
『おい！早く賭けた分払えよ！！』
『今日は宴だな！！』
『飲むぜ！！沢山飲んでやる！！』
『だから、賭け分払えって！！』

一部、賭け事をやっていた奴等が居たが…
まぁ、良いや…

今日は宴で飲み狂おう…

第十一録　鬼と一緒に格闘試合（後書き）

満身創夷の夷が間違っているのは理由がありますので…
誤記として報告はしないで下さいよろしくお願いします。

だ、誰か感想を…

第十二録　宴会で一度は通る道・・・だと思う・・・（前書き）

お久しぶりです皆さん…

ええ、遅れた理由はブッパしたんですＰＳＰが…

あと、おわびです…

十一録のループが直せません！！

直せる限り直しますので…

では！！

第十二録　宴会で一度は通る道・・・だと思う・・・

ワイワイ！！ガヤガヤ！！

広い宴会場に何百人もの鬼が酒を飲み、宴会が始まってからまだ一時間しか経ってないのに千本以上酒の空き瓶が出ている。

ちなみに、俺は未だに1本も飲めていない……

鬼1「何だよお前！？下戸なのか！？下戸なのか！？下・戸・な・の・か！？」

御「昔から酒は少し飲んだら酔っちゃうんでね……」

鬼2「おいおい、マジか……」

鬼3「そう言えば、おれ達の昔からの言葉であったよな……」

鬼達『酒を飲ませりゃ何でも治る！！』

御「は？」

鬼3「いやな？子供の鬼ってのは、酒に弱かったりするんだ」

御「えっ！？鬼って全員酒に強いじゃ…」

鬼2「それは、3分の2位の鬼だよ」

鬼1「だから昔から、酒に弱い子は酒を多く飲ませて、酒に強くさせるんだ」

御「それって、かなり危険なんじゃ……」

すると、後ろからガシッ！！と、後ろから肩を？まれた

鬼1「まぁまぁ、そう言わず」

鬼2「誰もが通る道だしな」

御「おいちょっと待てよ！！

それ鬼殺しじゃ…ちょ…あああああああっっっっっっっ！！！！！」

ゼ「やっぱり、お酒に弱いのね」

オ「そんな事言ったら駄目だよ～、個人の勝手なんだから～」

陰「よーし！！十本目あけるぞー！！／／／／／／／／」

鬼達『はい！イッキ！イッキ！イッキ！うおぉぉぉおっ！！』

陽「ぐすっ…どうせ私なんて作者から『あれ？これ誰だっけ？』とか言われる影の薄い子なんです…う、うわぁぁぁん！！」

ゼ「陽が泣き上戸なんだけど…」

オ「絡み酒じゃないからだいじょうぶだよぉ～…ケプッ／／／／／／／／」

ゼ「良いや…この際私は寝る…Ｚｚｚ…」

諏「お米！！お米はどこ！？／／／／／／／」

イ「それ酒樽だよ…」

～宴会場近くの場所～

御「ウプッ…嫌な目に合ったな…当分酒は見たくない…
そもそもあんなに飲まないって普通…」

凶「うぅ…、嫌な目に合ったなぁ…だから私はお酒飲めないって言
ってるのに…」

御・凶『あっ』

御「え～と、酒飲めなくて逃げてきた人二号？」

凶「じゃあ、酒飲めなくて逃げてきた人一号？」

御「俺、てっきり飲めると思ってたんだけど…」

凶「私も…」

御「…まぁ、座ろうか…」

凶「そうですね…」

御「よっと…まぁ、お疲れ様でした」

凶「いきなり何ですか？」

御「いや、まぁ～…なんか言ってみたかっただけだ…」

凶「…じゃあ、私も言ってみたいので…ありがとうございました…」

御「戦ってくれて…か？」

凶「えぇ、私が全力を出しても倒せなかったのは貴方だけでしたから…」

御「う～ん、まぁ、俺は存在してること自体が不条理だからな…お前もだけど」

凶「…出来れば、名前で呼んで欲しいのですが…お前だとさすがに…」

御「おっと、すまん…え～と…不平で良いか？」

凶「…名前の方が良いのですが…よしとしましょう」

御「じゃあ、不平」

凶「はい、何でしょう？」

御「あのな……」

凶「は、はい…」

御「ちょ、ごめん背中さすって、吐きそう」

凶「えっ！あ、はい…」

自主規制により例のあれは砂糖で表現させていただきます。

サラ↑砂糖です

凶「だ、大丈夫ですか！？
ゲ…砂糖がこんなに！？」

おい、●●と言いそうになったろ！！↑作者

御「はぁ、はぁ、大丈夫だ、吐いたら楽になったから、ゲ…砂糖を…」
おい、お前も●●とか言おうとしたろ！！↑作者

凶「ちょっと待ってて下さい、今薬出しますから！！」

御「あぁ、ありがとう（あれ？この時代に薬って有ったっけ？）」

凶「はい、薬です！！」

そう言って懐から取り出したのは、なんとも美味しそうな…

酒だった…

御「ちょい待て～い！！！！不平！お前、俺を殺す気か！！」

凶「鬼の間では酔って吐いたら酒を飲ませろって言葉があるんです！！」

御「それ悪化するから！！絶対悪化するから！！」

凶「分かりました、でもこのお酒は…」

御「えっ！回想入るの！！」

～宴会場にて～

凶「うぅ～…やっぱり馴れない…」

鬼Ω「あっ！鬼神様！！」

凶「？」

鬼Ω「はぁはぁ、やっと見つけましたよ…
鬼神様にこれを…てみんなが…」

凶「？……、お酒！？」

鬼Ω「えっ？ま、まぁそんなようなもんですよ」

凶「気持ちは嬉しいけど…」

鬼Ω「大丈夫ですって…、めちゃめちゃ弱いお酒で、確か水と同じぐらです。
まぁ、味はお酒ですけど…」

凶「あ、ありがとう…じゃあ、早速…」

鬼Ω「ああ～！！ちょっと待って下さい！！
御乃那様とお飲みになって下さい」

凶「？…何で？」

鬼Ω「そりゃあもちろん、それが媚…げふんげふん！！
御…御乃那様と話しやすい場所を作る円滑酒なんですよ！！」

凶「そ、そうなの？
！？…やばい吐きそう…ちょっと外行ってくるね…」

～回想外伝～

注意、これは不平が知らないことです。

鬼Ω「…行きましたか（ふっ、計画通り）」

鬼Σ「行ったか？」

鬼Ω「行ったよ…」

鬼ω「ふふふ、これで…」

鬼σ「計画が達成されるのも時間の問題…」

鬼Ω「ええ、題して…」

鬼達『鬼神様の子供を儲けちゃおうぜ！！作戦！！』

鬼Ω「さぁ、鬼神様！！後は鬼神様がやってくれるだけです。いや、ヤってくれるだけです！！」

～回想終了～

御「へへぇ～…あの鬼達が俺達のために酒を…」

凶「はい、あっ、どうせなら景色が良いところで飲みませんか？」

御「まぁ、俺はどこでも良いしな…」

凶「じゃあ、あそこにしましょう」

～さっきの場所から少し離れた場所～

凶「さぁ、どうぞ…」

御「ありがと…？
お前は飲まないのか？」

凶「…良いんですか？」

御「えっ？何が？」

凶「まぁ、良いです、私も飲みます」

御「ふ～ん、じゃ、とりあえず乾杯」

凶「乾杯…」

～その頃の宴会場～

ゼ「Ｚｚｚ…」

オ「あっ！このお酒良いよ～／／／／／／」

陰「うぅー、酔いつぶれはしなかったけど、お腹が…たぷたぷに…」

陽「あは、あはは…あはははははははははは！！」

諏「米…お米…白米は何処じゃ～～～！！！！」

イ「無いってここには…」

カオスとしているこの空間にスパーン！！と襖を開ける音が響いた

御「おい！！みんな逃げるぞ！！」

イ「どうしたの？」

御「酔ってないのはイェフだけか！？ちっ！！イェフ！！みんな連れて逃げるぞ！！」

イ「わ、わかった！！」

御「鬼共！！おまえ等不平に何飲ませた！！
いや、俺分かるけど…
あんな強力な媚薬見たこと無いんだが！！」

その時、後ろから…肩をトントンと叩かれた…

凶「どこにいくの？／／／／／／／／」

御「ちょ、ちょっと家に…」

凶「ふふふ、私たちの家はここでしょ？／／／／／／／／／／」

イ「準備できたよ！！」

御「でかした！！」

そして、このとき御乃那は、人生で最高速の…逃げ足を発揮した…

しかし、思い出してほしい…

不平凶鬼の能力は振り分ける程度の能力…凶鬼が全てを速さに振り分けたら…

凶「追いかけて欲しいのなら初めから言ってくれればいいのに～／／／／／／／」

ガシッ！！

御「ヤバッ！？」

凶「あはは～、悪い子はお仕置きしなきゃ…不平・激震」

ドズゥン！！と鈍い音が響いた…

床に叩きつけられたのは、当然の如く御乃那であり

それを見て若干涙目なのがイェフ…

酔っており、何も分からない人たちは、残りの御乃那ファミリー

さて、読者の皆様に問題です…

この後、御乃那がどうなるか…
まぁ、完璧にいつものパターン何ですけどね…

簡単に言うなら…

＼（＾０＾）／

第十二録　宴会で一度は通る道・・・だと思う・・・（後書き）

次は何時になるかなぁ～

まぁ、気長に待っていて下さい、では！！

第十三録　主人公って何時もこんな扱いだよな…？（前書き）

どうも、生存確認込みでの更新ですっ！！

遅れた理由を言いますと…

受験に使う二学期の期末などの為の勉強…

冬休みはゼミに行っておりまして…

一月の推薦入試が受かれば、夜も、うっほいっ！！なんですけれども…

あ、もちろん受かりましたら更新を続けたいと思います。

では、少ない量ですが、湯飲みの茶の最新話です。

良くお読みになって下さいませ…

第十三録　主人公って何時もこんな扱いだよな…？

宴会終了後の翌朝…

視点ｉｎ御乃那

ガラガラ…と音をあまり掛けないように戸を開ける

御「た、ただいま…」

玄関には全員がやさしく…

ゼ「おかえりなさい、朝帰りの御乃那”さん”？」

やさ…しく…

オ「突然だけどさっ！！」

やさし、く…

陰「父上～…フフフ…」

やさしく…

陽「とりあえず…」

や、やさしく…

全員『座れっ！！』

御「…はぃ」

皆さん、俺の家族は許さないようです…

朝帰りを…

ゼ「おい？」

御「はい…」

ゼ「何で朝帰りなんだよ？」

御「いや「言い訳はいいよ！！」…」

聞いたのそっちじゃ…

オ「御乃那さん？私達はおこらないよ？」

御「オーディン、伸ばし棒…」

オ「どうでも良いのそんな個性！！」

陰「父上？とりあえず一つだけ聞きます。」

陽「それによって、父上の人生変わるので…楽しみだなぁ…」

御「わ、分かった、何だ…」

ゼ「それはもちろん」

オ「御乃那さんは…」

陰「いったい…」

陽「どこまで…」

全員『ヤったかって、聞いてんだよ…』

ヤ、ヤってる事が前提で聞いて来やがる…

…嘘を付くのは嫌なんだか…

御「その、キスまでは…『す、すみませーん!!』!?」

陽「あ〜あ、どうします?父上…?ご本人、来ちゃったよ?」

ゼ「今、開けるわ…」

逃げてくれ不平!!

ガラガラ…

ゼ「こんにちわ…不平さん♪」

遅かった…

凶「あ、あの、昨晩は自分の部下のせいとは言え…

その、御乃那さんを犯してしまい申し訳ありませんでしたっ!!!!!」

言いやがった…

あぁ、終わった、俺の人生…

ゼ「その言葉が聞きたかったのよ」

凶「えっ?」

ジャラジャラ…ギシッ!!

急に不平の体に鎖が巻き付いた…
あ、あれは…

オ「えぇ、御乃那さんもしってる天の鎖ですよぉ～
ちなみに～、ほらっ♪もう御乃那さんの体にも♪」

何時の間にっ！？

凶「な、何ですかこれは！？能力を使ってるはずなのに！？」

陰「は～い、イェフ…運んで…」
イ「じゃあ、僕の部屋に連れてくね。」

そう言いイェフは不平を引きずり、自分の部屋に入って言った…

ーーは、離せ！！い、嫌だ…何だ！！この部屋は！！
鞭とかがいっぱい…
嫌だ…怖い怖い怖い怖い
御乃那さん助けて…
いやゃゃゃゃゃぁぁぁぁぁ！！！！！ーー

御「ま、まさか俺もあそこに行けと？」
陰「違いますよ父上ぇ…
私達が酔ってたりして足手まといになったのが、
いけなかったんですから…」

陽「そうです、だから許してはあげますけれど…」

ゼ「独占欲が強いから…」

オ「しばらくの間…」

ーーー監禁しちゃうね？ーーー

俺はそれから先のことは、あまり思い出したくない…

過ぎ去っていった時間がどれほどあるのか…

俺には宴会をしたのが昨日に思える…

徹底的に犯された人はこんな感じなのだろうか…

まぁ、思い出したくない物は放って置いて…

諏訪子がいつの間にか土着神だか何だかで…

能力も出来たらしい…

ただ最近、別の神と戦うために心と体が疲れた～…

とか言って、俺に好き勝手やって帰ったが…

それと、もうすぐ監禁が終わるらしい、

久々にアイマスクを外されたとき、目が焼け死ぬかと思ったが…

まぁ、それはどこかに置いて、諏訪子が戦う場所に行ってみようと思う…

名前を付けるとするならば…

諏訪子の大戦だから…

ーーー諏訪大戦っ！！ーーー

第十三録　主人公って何時もこんな扱いだよな…？（後書き）

更新するとなるなら、次は諏訪大戦編になります。

軽いネタバレですが、敵をだしますよ～…と言うわけで…

眠くなったので寝ます。

寝れるときに寝ましょう！！

では（・ω・）ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1428w/

東方の世界ログインやっちゃたよいけないチート

2012年1月11日23時53分発行